

6月14日 JASH スタディグループ発表文(日本語要約)

2014年のAMASC世界大会に向けて、2011年10月にJASHスタディグループが発足した。8同窓会から集まった43人は、3つのサブテーマに分かれて計11回の勉強会を開いた。テーマに関する討論、読書などを行うことで、それまではやり過ごしていた情報にも注意を向けるようになった。勉強会の他にも2回の講話会やフィールドワークを行った。

2013年3月の「JASHの日」には、AMASC会長パメラ・スナイダーを迎えて中間発表を行った。その後のスタディの過程で、関連がないと考えられていた各グループの議論が、その根底で一つにつながっていることが判明する。それは感受性と精神性にあふれる日本人としてのアイデンティティーとの出会いであった。ここに3年間のスタディの成果を報告する。

第1グループ

Listening with One Heart to the Voice of the Poor

AMASC マルタ大会から引き継いだテーマであり、次の3点を前提としてスタディは出発した。

- ① 貧困には物質的なもの、精神的なものなど多くの種類がある
- ② JASHも、会員個人もさまざまな形で貧困との戦いを実践してきた
- ③ JASHの支援活動は多くが教育に関連するもの

1988年JASHはフィリピン・デュシェーン列聖記念事業委員会を設置した。フィリピンで活動する聖心会のシスター方に協力して、大学に奨学金を、高校に教科書を、欠食児童のいる小学校に給食を、15年間支給した。その後も個人レベルでフィリピンの女性たちへの支援活動を続け、現在も母親の自立を通じて子供の教育の促進に貢献している。

こうしたJASHの伝統を受け第1グループは教育問題に焦点を絞る方針とした。「教育は世界を変えうる最大の武器である。貧困は自然発生するものではない。人間が生んだ現象である限り我々の手で克服することができる」(ネルソン・マンデラ)
この言葉がヒントになり、30年間ケニアとウガンダの初等教育に尽力されたSr.寺田和子を招いて講話会を開いた。

Sr.寺田は1980年～2005年ケニア、2006年～2010年ウガンダの小教区や公立学校で教職に携わってこられた。シスターは「世界はひとつの身体です。不要な部分などなく、一部が病めば全身が病んでしまいます。人の苦しみを自分のものとして感じることもできる、豊かな人間性を持つ人でいてください。その人の声に耳を傾ければ、何を求めているかわかるはずです。」と話された。ところがシスターが見せてくださった写真の中のウガンダの子供たちは、屈託のない笑顔にあふれていた。貧困という過酷な現実との落差に息をのむ

私達に、シスターは言われた。「彼らはどんなに貧しくとも分かち合うことをいとわないのです」と。それに比べ現代の日本人にこのような笑顔が少ないのはなぜだろうか。

その一因はどれだけ物があっても心が満たされない、つまり「もったいない」精神を忘れていないことではないだろうか。カリタス・ジャパンは貧困撲滅運動の一環として、食べきれなかった物を持ち帰る為の折りたたみ式容器を販売している。その名も“Mottainai-ner”。「もったいない精神を持つ人」という意味を組み込んだ造語である。販売価格の一部はチャリティーとなる。世界の残飯大国日本に「もったいない」の心呼び覚ます取り組みである。



カリタスジャパンが販売している持ち帰り容器 Mottainai-ner

今日の日本から笑顔が減ったことには、直接的なコミュニケーションの減少も関係している。私たちは、いつでもどこにいても、様々な通信手段で大勢の人とつながることができる。教皇フランシスコは述べられている。使い方さえ適切なら「インターネットは、まことに善なるもの、神の賜物である」と。(第48回世界広報の日に向けてのメッセージより)

しかし現代テクノロジーの介在ゆえに、私たちは心の中を明かせないことがある。相手の反応が見えないし、聞こえないからである。テクノロジーを通さず、時間と空間を共有するほうが心を開きやすいことは否めない。とは言え、顔をつき合わせて話しても、理解し合えるとは限らない。ときに自らの考えに頭を巡らせて、目の前の人の言うことを聴いていないことがある。

さらに環境や文化、背景の違いも影響する。第2バチカン公会議以前に聖心に在学した者の大半は、家庭では神道や仏教に根差した習慣、学校ではカトリックの習わしに従う二重生活を送るうちに、自国の文化に否定的になることもあった。

第2グループ

Listening with One Heart to the Concerns of Others-Discussion between Cultures

そこで第2グループは学生時代には意識的に避けていた日本の伝統的な習慣、伝説、神話をきちんと知る必要を感じ、Sr.増田早苗に講話会を依頼した。「神祭りと信仰心」と題しておこなわれた。Sr.増田は、日本文化、神話、昔話などについての著名な学者であり、聖心女子大学大学院で修士号取得後、アメリカで霊性神学と心理学を学ばれた。ロヨラ大学で研究中に自国の文化を深く知ることの重要性に気付き、以来日本の神話と伝統の研究に携わってこられた。

シスターの講話から、祭りなどの習慣が紀元前にさかのぼる日本古来の宗教、神道に由来することを学んだ。神道と同様の長い歴史を持つ稲作は、日本人の生活において大事な位置を占めてきた。米は神々からの賜物と考えられていた。稲作は日本人の暮らしと切り離せない。そこでおこなわれる「祭り」は無病息災、雨乞い、豊作祈願など生活にまつわる神々への祈りから発展したもので、神々と、そして地域社会の人々との絆を強める役割を果たした。メンバーの何人かは日本各地の祭りを実際に見学し、祭りの持つ意義を体験した。

自然の中に神々の存在を感じた日本人は、農耕社会に必要な和の精神とあいまって、自然を征服しようとはしなかった。こうした感性ゆえに 6 世紀に伝来した仏教に対しても、拒否することなく生活や習慣の中に上手に取り入れていった。それではなぜキリスト教は日本に根づかなかっただろうか。

井上洋治神父によると、キリスト教はヨーロッパの思想と文化を持つ「生身の人間」、つまり西洋人の宣教師によって伝えられた。宣教師たちはヨーロッパで育った大木を日本の土壌にそのまま移植しようとしたと言える。そこで仏教の場合のように日本的な方法で受け入れることに無理があったのではないか。

第 2 グループは日本の文化をよりよく知ろうという好奇心から出発し、自らのルーツの発見に至った。第 2 バチカン公会議以降、教会は宗教間の相互理解を奨励し、日本のカトリック教徒は、日本人としてのアイデンティティーを保つことが可能になった。禅の修行は、黙想の一手段として、カトリックに取り入れられて貢献している。

第 3 グループ

Listening with One Heart to the Dialogue between Religion and Science

同時に、教会は科学との対話にも踏み出した。第 3 グループは、ジョージ・コイン神父の記事を皮切りに、哲学者、科学者、教育家等による著書や記事を数多く読んで、テーマを深く掘り下げていった。加賀乙彦、茂木健一郎、村上陽一郎、河合隼雄、中村桂子の作品などである。

読書と過去の経験から、まず現代人の科学偏重の傾向に気づいた。科学は人命をも含む自然を制御できるとさえ考えていた。しかしスタディ開始直前の東日本大震災と福島原子力発電所の崩壊は、科学が万能ではないことを私達に見せつけた。

次に読書を通じて、自らの日本人としてのアイデンティティーを意識した。聖心育ちの私たちは、カトリック的な生き方に大いに影響を受けている。第 2 バチカン公会議から半世紀、私たちは、日本人として、また聖心の卒業生として、二つのアイデンティティーを保って生きる責任をますます痛感している。

「二つのアイデンティティー」は、井上神父、遠藤周作ら、著名な日本人たちも考え抜い

てきた問題である。ヤングアラムネのグループは、遠藤の「沈黙」を勉強し、2013年「JASHの日」に成果を発表したが、日本人カトリック作家の遠藤は生前、自分の「身体に合わない洋服を和服に仕立てなおす作業をしている」と語っていた。

第3グループもまた、私たちの心の奥底に、生来の信仰心が息づいていることを自覚した。「私たち日本人は、主体も客体も包み込む根源的な生命力と言うべきものを大切にしています。」(Sr.増田早苗)という言葉で表されるように、私たちにとって、宗教と科学は対立軸上にあるのではなく、双方が互いを支え合って存在しているのではないだろうか。「宗教なき科学は不完全であり、科学なき宗教は盲目である。」とアルベルト・アインシュタインは語っている。

日進月歩の科学は、今や「神の領域」に迫っている。iPS細胞、クローンなどの研究は、命を救うことと人類破滅の両極の可能性をはらんでいる。30年～40年前にAID(非配偶者間人工授精)で生まれた人たちが、グループを立ち上げ、その精神的苦悩を分かち合っていることを知り、ショックを受けた。自らが子供を望むあまり、その子の将来を真剣に考えなかったのだろうか。

科学者、中村桂子は重要な提言をしている。「私たちが自然の一部であることを忘れないでほしい。五感をめいっぱい働かせて、生物倫理に基づく世界観を持たねばならない。」中村は、福島の小学校に農業科を設置。子供たちに、自然を征服できると考えることは間違いであると、体験をもって教えようとしている。

JASH スタディグループの3つのグループは、違うスタートラインから出発し、同じゴールにたどり着いた。それは日本人としてのアイデンティティーの自覚である。この3年間私たちは多くのことを学んだ。このスタディの成果は誇れるものと言える。しかし、このゴールは、未来への新たな出発点でもある。新たな出発点に立って、周囲の様々な声に真摯に耳を傾ける努力を続けたい。

以上